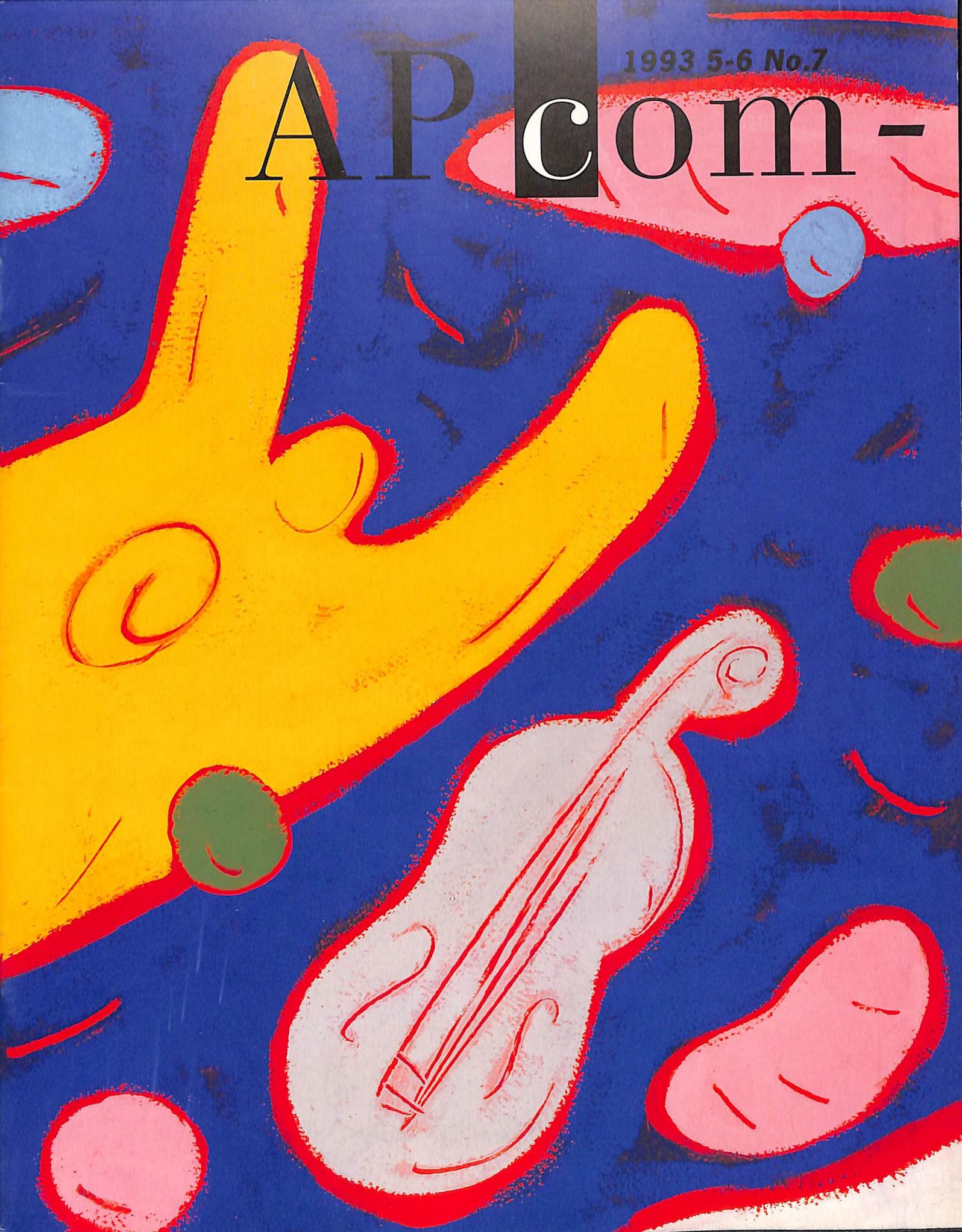


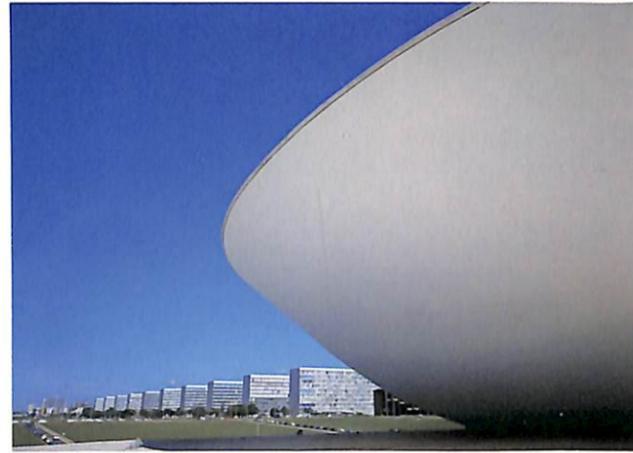
1993 5-6 No.7

APCOM-





世界の建築文化を訪ねて……⑦



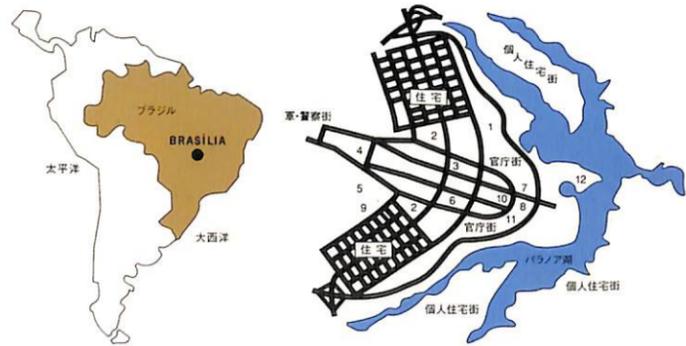
FUTURE COME TRUE BRASÍLIA

……ピッピッピッピッピッ。
ボクノコト、オボエテイルカイ?

キミタチガボクヲムシスルヨウニナツテカラ、
モウ30ネンモタツチャツタ。ボクモスイブンセイチヨウシタ。
カツテボクノシンジタミライガ、
ヨウヤクイマ、シツゲンシツツアルンダ。ダカラ、オイデヨ。
ソシテ、モウイチド、ホントノボクヲミテホシイ。
フューチャー・カム・トルー、ブラジリア。
ピッピッピッピッピッ……

ブラジリア 実現した未来

写真：伊奈英次
文：編集部



- ブラジリア・プラン
ピロット全体図
1. ブラジリア大学
 2. 商業施設
 3. 国立劇場
 4. TV塔
 5. 市民公園
 6. カテドラル
 7. 大統領府
 8. 三権広場
 9. ドン・ボスコ聖堂
 10. 国会議事堂
 11. 最高裁判所
 12. 大統領官邸



高さ218mのTV塔。展望台があるが現在は閉鎖中
前頁：三権広場に建つ議事堂[下院]

C
O
N
T
E
N
T
S

1

APcom-REPORT
世界の建築文化を訪ねて⑦
ブラジリア/実現した未来

15

ブラジリアの
都市と建築を知るキーワード

17

APcom-AREA STUDY
販売店のあるまち⑦
高知・高知市 太平産業株式会社

21

APcom-FORUM
ARCHITECTURE VIEW UP
神戸ハーバーランド

25

INFORMATION
創刊1周年記念プレゼントのお知らせ
第17回全日本サッカー大会
「現代建築家100人展」米国巡回展

APcom-5,6月号 No.7
発行：YKKアーキテクチュラル
プロダクツ株式会社
〒101 東京都千代田区神田和泉町1番地
tel.03-3864-2051 fax.03-3864-6103
編集：APcom-編集室
印刷：株式会社日刊スポーツ印刷社
発行日：1993年5月20日

制作協力：株式会社I&S
株式会社アルシエツ社
AD：伊丹友広
デザイン・レイアウト
：イットイズデザイン
表紙イラストレーション：富沢天

MODERNISM

ニーマイヤーの近代主義

ブラジリアは長い間屈辱と汚名に甘んじてきた。
 そこで生活する人間の存在を、この未来都市はすっかり忘れてい
 とジャーナリズムは書き立てたのだ。
 以来30余年、誰もブラジリアを語るなくなってしまった。
 だがはたして、都市を人間の側からだけ見ることに、
 間違いはないのだろうか。
 ブラジリアを、そうした既成概念からとりあえず解放してみるこ
 と。
 そのときブラジリアは、我々がかつて抱いていた、
 本当の未来図を見せてくれるはずだ。

ブラジリアには、常に人間不在の都市という
 言葉がつきまといってきた。機能主義一辺倒で、
 ただ大きいばかりの、人間を忘れた容器だけ
 の都市……。

確かに、これまでブラジリアをよく言う人
 にお目にかかったことがない。都市計画や建築
 の専門家間でさえ、とくにその開発に関わ
 ったものでないかぎり、ブラジリアを好意的
 に見ている人間はほとんどいないといってい
 い。それほど今日ブラジリアの評判はかんば
 しくないのである。

そんなおり、こんな噂話を聞いた。
 「あのブラジリアに、なんとスラムができて、
 ようやく人間の住むまちらしくなってきたん
 だって」

うーむ、スラムと人間らしさを同一視する意
 見にはちょっと納得しかねるが、とにかく不
 名誉な形容ばかりが目立つブラジリアであ
 る、こういう評価が飛び出してくるとにわか
 に興味をわいてくる。しかも、ブラジリアの
 建設に大いに貢献したオスカー・ニーマイヤ
 ーは健在で、近年またブラジリアに新しい作
 品を発表したらしいという声まで聞こえてき



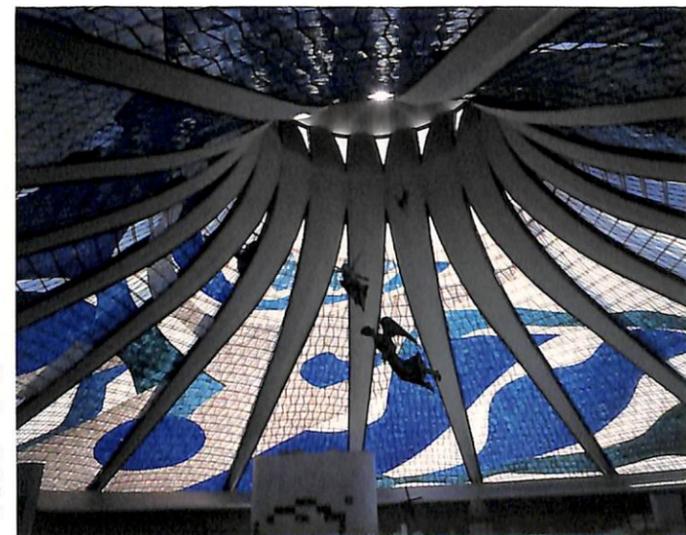
た。ならば、一度どうしてもこの眼で事実を
 見る必要がある。

我々はある種の使命感を胸に抱いて、ブラジ
 リアへと旅立ったのだ。

「白昼にこの都を映した写真をごらんになる
 とわかるが、どの一枚にも、どんな巨大構築
 物をとった一枚にも、きっと背景に上部に白
 い積乱雲がそそり立っているのを発見するは
 ずである」と、かつて開高健も書いているよ
 うに、ブラジリアの空を見上げると、とにか
 く目に入ってくるものは紺碧の広がり雲だ
 けだ。まずそのことに我々はひどく驚いてし
 まう。ここは日本とは絶対に異なる場所だ
 ということを、いやがうえでも認識させられ
 るというわけである。

実はこのことはブラジリアについて考える場
 合、案外重要なことなのである。あんなに批
 判された人間云々という言葉は、この空の下
 ではあまりリアリティをもたないことがよく
 分かるからだ。都市は地平線にまで広がっ
 ていこうとする願望をもち、また建築物はよ
 り巨大な体格を欲する。いざこの地に立つと、
 むしろそうしたことが普通のことに思えてく
 る。ここでは、あらゆるものはメガスケール
 であるほうが、ずっと普通なのだ。

オスカー・ニーマイヤーの公共建築は、その
 ことを実によく理解しているように見える。
 ブラジリアにとって、ニーマイヤーの近代主
 義の導入はむしろ当然の帰結であった。すく
 なくとも、この乾燥した、そして真青な空の
 下でそれらの建築物はじつによく調和してい
 るのである。

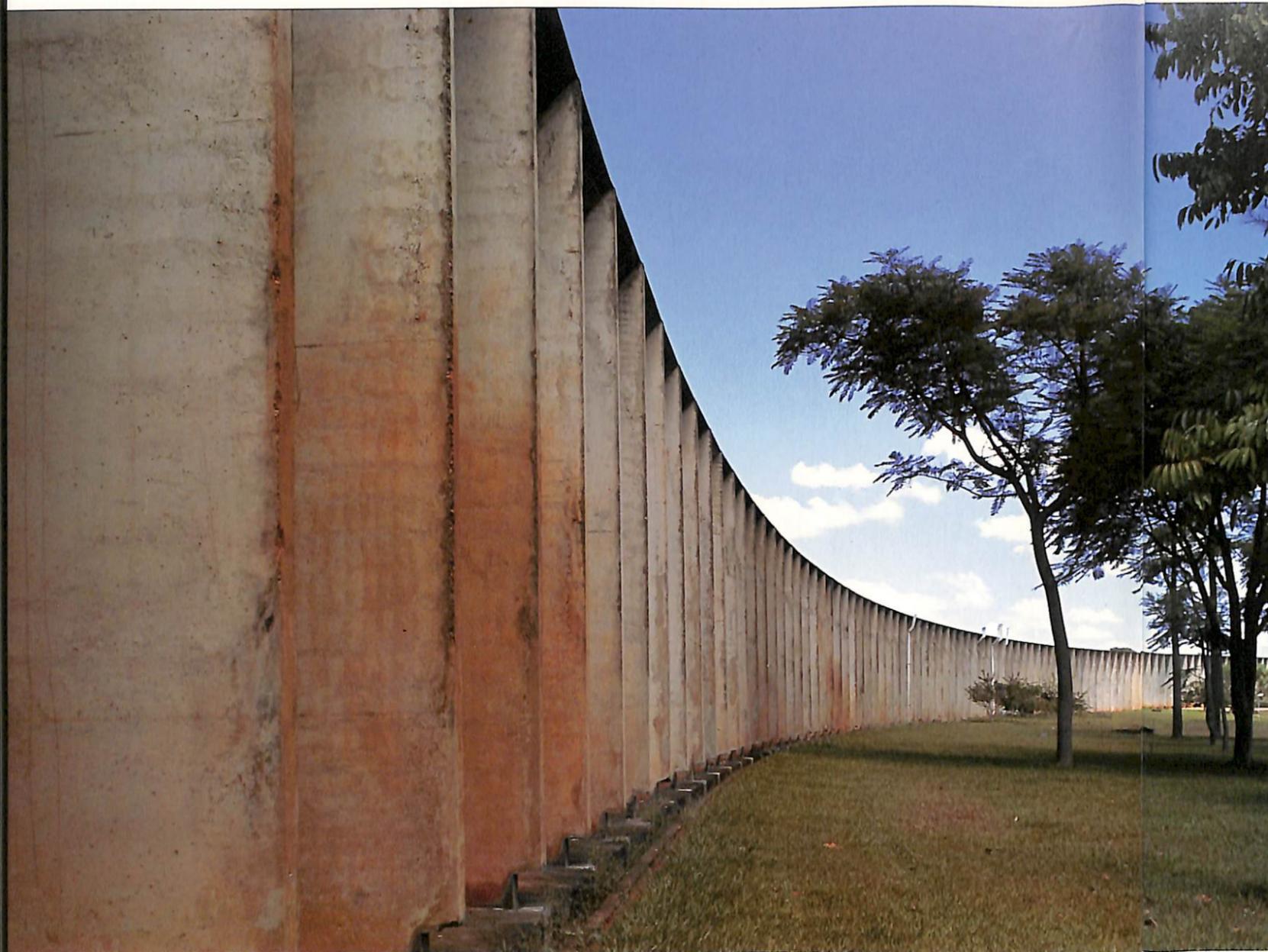


上：カテドラル 直径66m、高さ36mの地
 上部分は単なる屋根で、祭壇部分はすべて
 地下に収められている。3~8pまで設計は
 すべてオスカー・ニーマイヤー
 下：カテドラル内部 16の梁で固定された
 ドームから天使がつり下げられている。ス
 テンドグラスはマリーナ・ビレットの作
 前頁：三権広場中央の、議員会館と上院下
 院の議事堂

MODERNISM

ニーマイヤーの近代主義

広大な土地に、突然出現した未来都市。ブラジリアは、1960年代まさに「希望の都」として我々の眼前に現われた。工業の発展と技術革新によって離陸しようとする戦後世界にとって、ブラジリアは、その来たるべき時代の都市イメージを具現化しようという最初の試みであった。近代都市理論に基づく新都市、モダニズム建築の饗宴、そして遷都への飽くなき情熱……。それは未来を志向する、まさしく希望そのものとして存在する都市と建築の壮大な実験場であった。



上：ブラジリア大学・講義棟
 プラーノ・ピロット[15p参照]の翼部分を模した全長720mのカーブは壮観
 下左：外務省 弓型の柱からアルコ[ポルトガル語の弓]の宮殿ともよばれている。
 ニーマイヤーの作品の中で最も高い評価をうけているという
 下中：外務省3階部分内部 空中庭園や彫刻、絵画などが展示されている
 下右：外務省1階部分内部 ル・コルビュジエの影響と思えるような斜路を
 ニーマイヤーは随所に使用している

上：国立劇場入り口付近 内部は大きな温室といったところ
 中：国立劇場 メキシコ・アステカの神殿をイメージしてつくられたという
 下左：大統領府 三権広場の北側に建ち、南側に建つ最高裁判所と対をなす
 下中：国家会計検査院 間欠的に柱に設けられた滝が流れる
 下右：プラーノ・ピロット胴体部分に整然と並ぶ各省庁

都市計画もさることながら、ブラジリアはその印象的な建築群によって世界に知られるようになった。しかし、ここでも都市計画と同様に、近代主義を貫徹することによって成立する近代建築の、いわばネガの部分のみが大きく取り上げられて、批判の集中砲火を受けることになった。ニーマイヤーの公共建築には温もりがない、人間性を欠いたコンクリートのかたまりにすぎないと。

確かに、官庁街に整然と並ぶ省庁の箱型建築を見るとそういう面があることも感じられなくはない。また、三権広場の中央に建つ高層ビル議員会館の外観に、画一性と装飾の排除をうたったインターナショナルイズム[国際洋式]の建築言語を見いだすことはたやすだろう。しかし、ブラジリアにおいてニーマイヤーが試みようとしたことは、インターナショナルイズムの徹底や合理主義による造形では

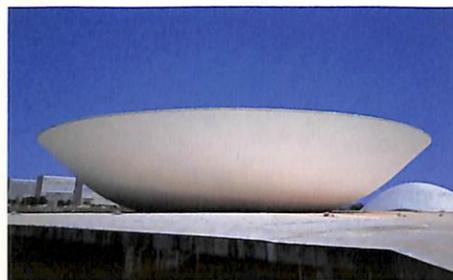


ないことは、他のニーマイヤーの建築を見ればたちどころに了解できるはずだ。

ニーマイヤーは、そうした合理主義による均質空間の創造からさらに一步踏み出しているように思われる。たとえば、ここに紹介したような、ある種彫刻的ともいえる建築作品を見ると分かるように、それらは空間を感じさせるというよりは量塊的であり、また単体の建築物でありながらその周囲の空気も取り

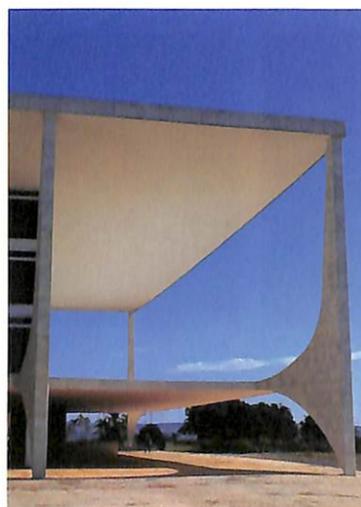
SCULPTURE フォルムへの意志

ニーマイヤーの建築のその最も特徴的なところは、フォルムに対する執拗なこだわりである。なによりもフォルムが先行し、そしてその構造が決定される。だから、構造が決定した時点で、ニーマイヤーの設計作業は終了する。この簡潔にして深い設計態度が、ブラジリアのユニークな建築物を生んだのである。



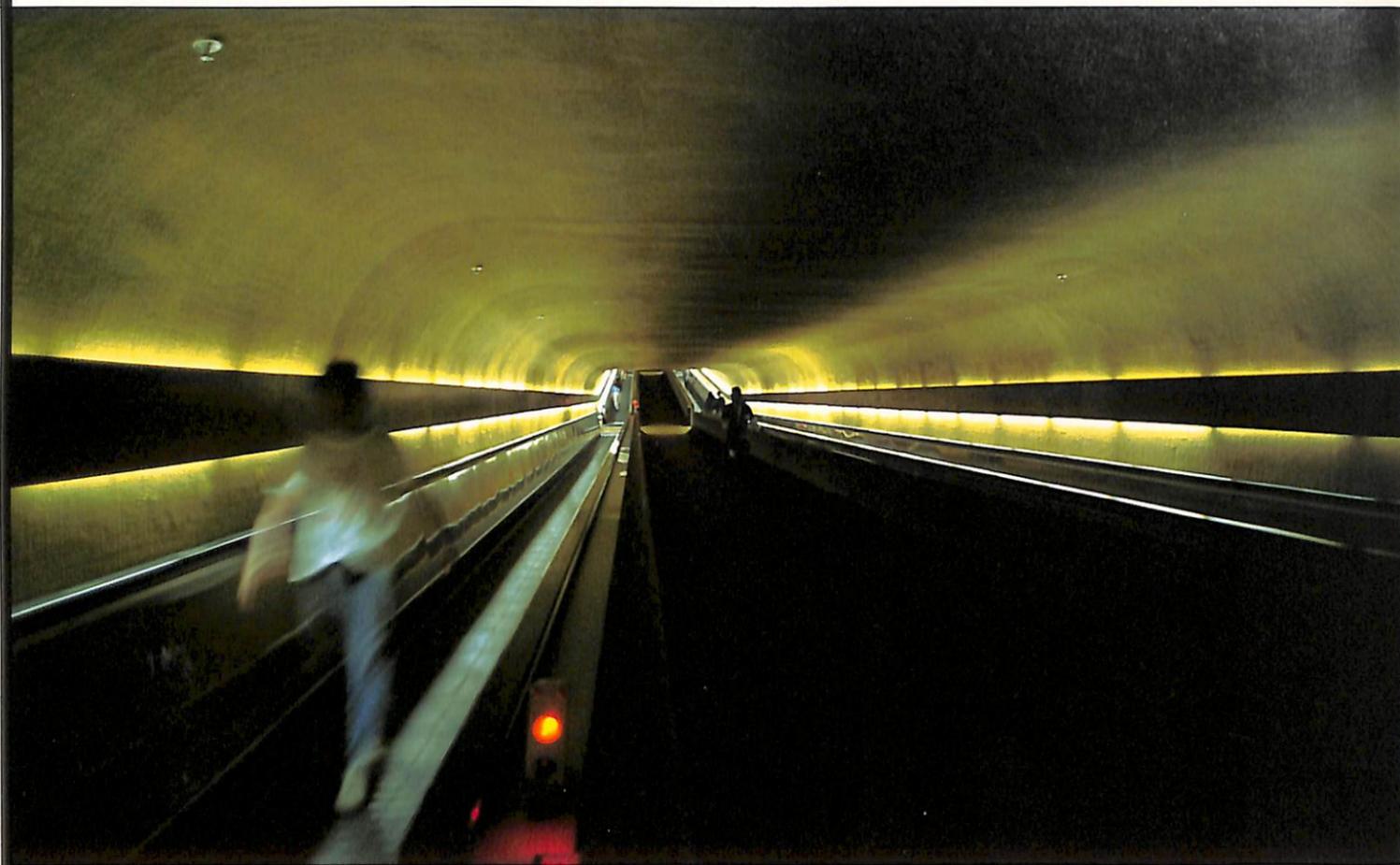
込んで成立するような、きわめて環境的な作品という面を強くもっている。あえていえば、そこに表現されているのはフォルムの意志とでも言えるような、強力なかたちへのこだわりである。

フォルムとしての建築の創造。これは言い換えれば、近代主義を構造の側から捉え直したことに他ならないのだ。



上：軍のモニュメント・ホール このアーチ状の下で声を出すと、音が反響しあうのでいつまでもなり止まない
中：国会議事堂の下院[手前]と上院[奥]
下左：ファティマの教会
下右：最高裁判所の柱
次頁：軍のモニュメント・ホールを西側から見る





SCIENCE FICTION 未来都市の内部空間

実際にその空間に踏み込んでみると、そこは2001年の未来都市だった。まるで手塚治虫の漫画や小松崎茂の挿し絵でみたような世界……。建築の外観とは違って変わって、空間性を強烈に意識した場を、ニーマイヤーは、その内部に展開させたのである。



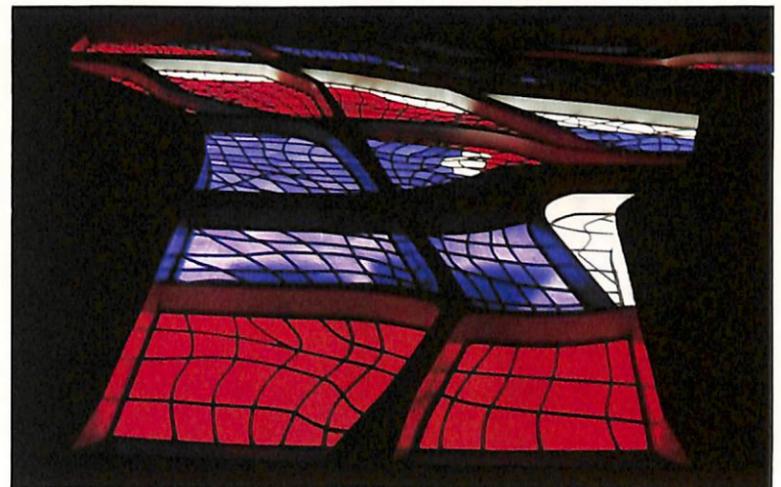
上：議事堂をつなぐ廊下。動く歩道がいかに未来っぽい
中：省庁と分室を結ぶ廊下内部
下：省庁と分室を結ぶ廊下外観。日差しをさけるためといわれているが、内部の演出効果をねらった仕掛けに見える

ニーマイヤーは、ある雑誌のインタビューでこんなことを言っている。「重要なことは、建築と構造、建築と技術が一体となっていなければいけないということだ。特に構造については完璧に解決されていなければならない。(…)たとえば、国会議事堂、大統領府。これらはすべて、構造ができた時点で、既に完成していたと言える」ニーマイヤーにとって、恐らく最大の関心は常にフォルムであった。そしてその場合、創造されたフォルムを建築へと導くものが、構造であり、それを可能にするのが技術だというわけだ。もともとニーマイヤーは、直線によって構成される建築物には強い拒否反応を持っていたようだ。インターナショナルイズムに傾斜した建築デザインから出発しながらも、ニーマイヤー自身は、むしろいかにしてその直線的なかたちから逃れることができるかが課題であったという。そして、RC造の建築にとって最も自然なのは、実は直線ではなく曲線であるというコペルニクスの発見に至るのである。つまり、コンクリートという素材の最大の利点はその可塑性にあるという発見。ニーマイ

ヤーはその確信をもとに、曲線をふんだんに取り入れた建築をつくり始める。ブラジルにおいてそれは一挙に開花する。フォルムの建築の開始である。ニーマイヤーにフォルムへの志向をめざめさせた曲線、彼はそれをいつごろから意識するようになったのだろうか。これには愉快的逸話がある。というのも、ニーマイヤーがフォルムの重要性を認識して曲線を発見することになった場所とは、あのリオデジャネイロの、コパカバーナ海岸だというのである。事務所のあるコパの海岸をポーッとながめていた、その若き建築家の目に入ったものは、美しくしなやかな、そしてエロティックな女性の肉体であった。さらに海岸線をずっとたどっていくと、そこには砂糖パンの名で親しまれている円錐形の岩山ボン・デ・アスカルが飛び込んできた。そうか、自然の形とは、曲線のことだ!!。女性の肉体と山からフォルムの建築が誕生したというのは、なかなか楽しい話ではないか。この逸話を聞いた後で、たとえば三権広場の議事堂を見ると、人間性云々という評価が、まるで見当違いなものに聞こえてくる。確かにこのおわん型の議事堂、ぐっと近づいて見ると、なんだか妙に色っぽい。人間の肉体がつくりだす艶やかな肌理のようなものが感じられるのである。さらに、そうした批判が決定的に疑わしく思えてきたのは、その内部に入ったときだった。なななんだ、これは…！ 上院と下院をつなぐ議事堂の廊下は、床も壁も天井もフェルトのような布性の素材で覆われていて、まるで沼地にでも迷い込んだような不思議な感覚。外観の印象とのあまりにも強烈なズレ。一瞬茫然と立ちすくんでしまった。しかも、この明らかに意識され演出された外部と内部の差異は、ニーマイヤーの建築の多くに仕掛けられていたことが分かったのである。ついでに、カテドラルでの驚くべき体験についても報告しておこう。カテドラルの内部でガイドに誘われるままある実験を行った。ちょうどその直径[対角線]上に立って、円形部分の壁にはりつきながらガイドが私の名前をささやいたのである。と、どうだろう、その小さな声 $66 \times 3.14 \div 2 = \text{約}103\text{m}$ の壁を伝わって私の耳に届いたのである。なんとカテドラルは、どんなささやき声も反響させてしまうようなサウンド・スケープの場であったのだ。



BRASÍLIA



上から順に
1 番目：下院の内部。天井から降り注ぐ無数の緑の光線
2 番目左：上院の内部。ドーム内は、緑と青の対比が鮮やか
2 番目右：ライトアップされた三権広場の議事堂
3 番目：パンテオン内部のスタンドグラス
4 番目：暗闇に目が慣れてくると、壁画の前に書物のオブジェが設置されているのが見えてくる
5 番目：パンテオン・テリベルタージュの外観。
設計：オスカー・ニーマイヤー [1986年]

ニーマイヤーの建築を写真だけで判断すると大きな間違いだということに気づかされるのは、その内部空間を体験した時だ。ニーマイヤーの作品を撮影した建築写真をずいぶん見たが、その内部を紹介したものはあまりなかったように思う。しかし、その内部空間にも外観に劣らぬ個性溢れる設計思想が隠し込められていたのである。

一見インターナショナルイズム風の省庁ビルの廊下や議事堂内部、またカテドラルのステンドグラスの天井。さらには照明を極端に落とした真暗闇のスペースをもつパンテオン。そのどれも、強烈な日差しの下で圧倒的な効果を発揮する。

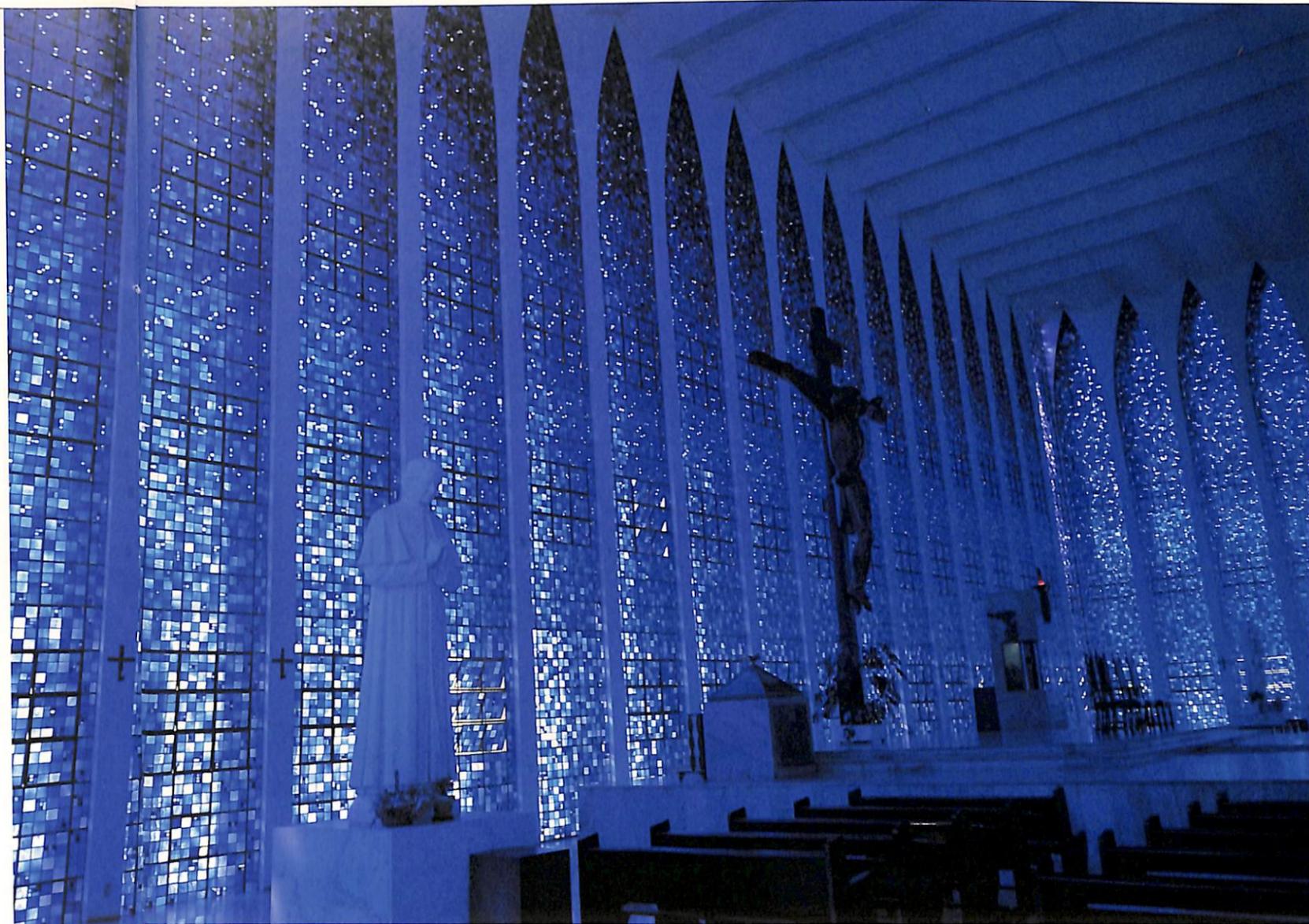
たとえば、パンテオン。入り口のドアが閉められると、ほぼ完全な漆黒の世界になる。そ

してエントランス・スペースから手すりにつかまりながら階段をゆっくり登っていく。目がようやく慣れてきて、そこにほんやりとあわい光に映しだされた壁画を確認したあと、さらに上まで登っていき、その階段が終わってふと仰ぎ見ると、外光を透過して静かに輝く赤と紫色のステンドグラスが眼に飛び込んでくるのである。実に心憎いばかりの演出である。

ところで、ブラジリアの建築の内部空間を語る時、ドン・ボスコ聖堂について語らなければ片手落ちになるだろう。ニーマイヤーの作品群と勝るとも劣らぬ異彩を放つ建築。その内部は、ご覧のようなまさしく光の饗宴である。ここではついに光そのものが、空間を満たす物質になっているのだ。

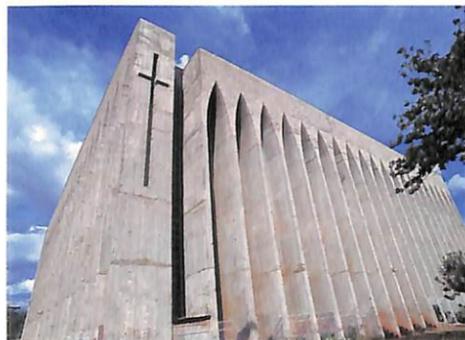
何階調かの濃淡のついた青色のステンドグラスを組み合わせることでつくり出される光の無数の束。それらは上部にいくにしたがって濃くなっていく。そして、その光の束は天井中央部へ集められて、ついに一つの巨大なシャンデリアへと収束する。あたかも神の国へ誘われるような崇高な感覚——。自然光によってつくりだされたその光の人工空間の内部で、我々は神と対面するのである。すくなくともそういったヴィジョンを幻視させるに十分なヴァーチャルな空間である。

実現された未来。ドン・ボスコ聖堂の青く輝くその姿は、まさしく先取りされた未来の神の空間ではなからうか。

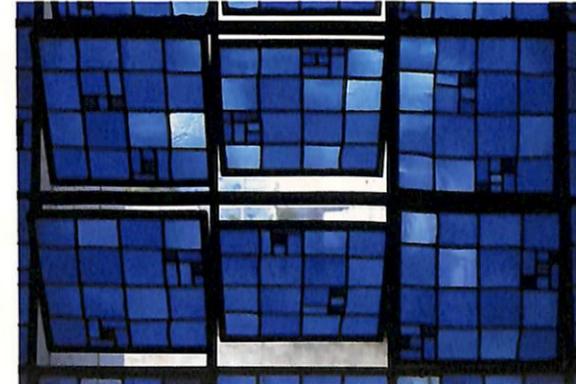
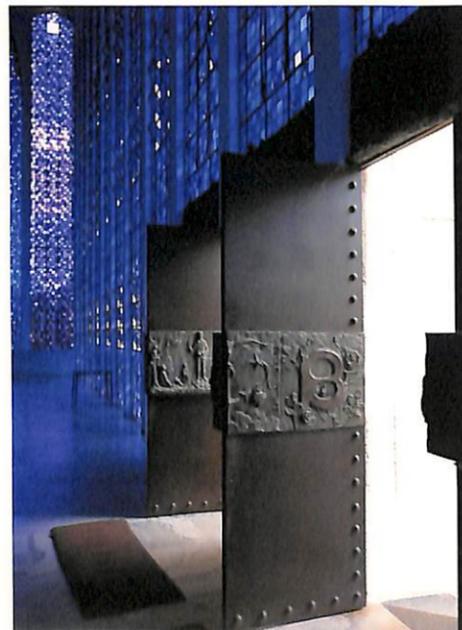


SUBLIME 光の形而上学

ブラジリアの建築は、内部に入ったときその真価を発揮する。
ニーマイヤーの建築もそうだが、このドン・ボスコ聖堂もそうだ。
シンプルで清楚なコンクリート造の外観。
しかし、その内部は、光の氾濫する神の世界であった……。



左：ドン・ボスコ聖堂外観
設計：カルロス・アルベルト・ナーベス
右：ドン・ボスコ聖堂入口



上：ドン・ボスコ聖堂内部。
その美しさは筆舌に尽くし難い
下左：ステンドグラスによる光の効果
下右：何階調かの濃淡のついた青色の
ステンドグラスを組み合わせる



MONUMENT 歴史の刻印

ブラジリアは、モニュメントの多い都市だ。
30年といういわゆる過去を持たない都市ゆえに、
歴史は、為政者によって
人為的につくり出されるのである。
モニュメントは、その短い歴史を神話に変えてしまう。



上：クビチェック大統領記念館に建つくビチェック像
左から順に
1番目：大統領府の前にあるブルーノ・ジオリジ作労働戦士の像
2番目：最高裁判所の前にある目隠し裁判の像
3番目：三権広場にあるクビチェック大統領像。目は大統領府をにらむ
4番目：クビチェック大統領記念館の前の水晶を模した石像

参考文献：Oscar Niemeyer *Meu sócio e eu* Editor Revan Ltda, 1992 / Oscar Niemeyer *OSCAR NIEMEYER ALMED*, 1992
雑誌「日経アーキテクチャ」1991年11月11日号 / 「世界建築史の旅」平島 二郎、中公文庫、1992



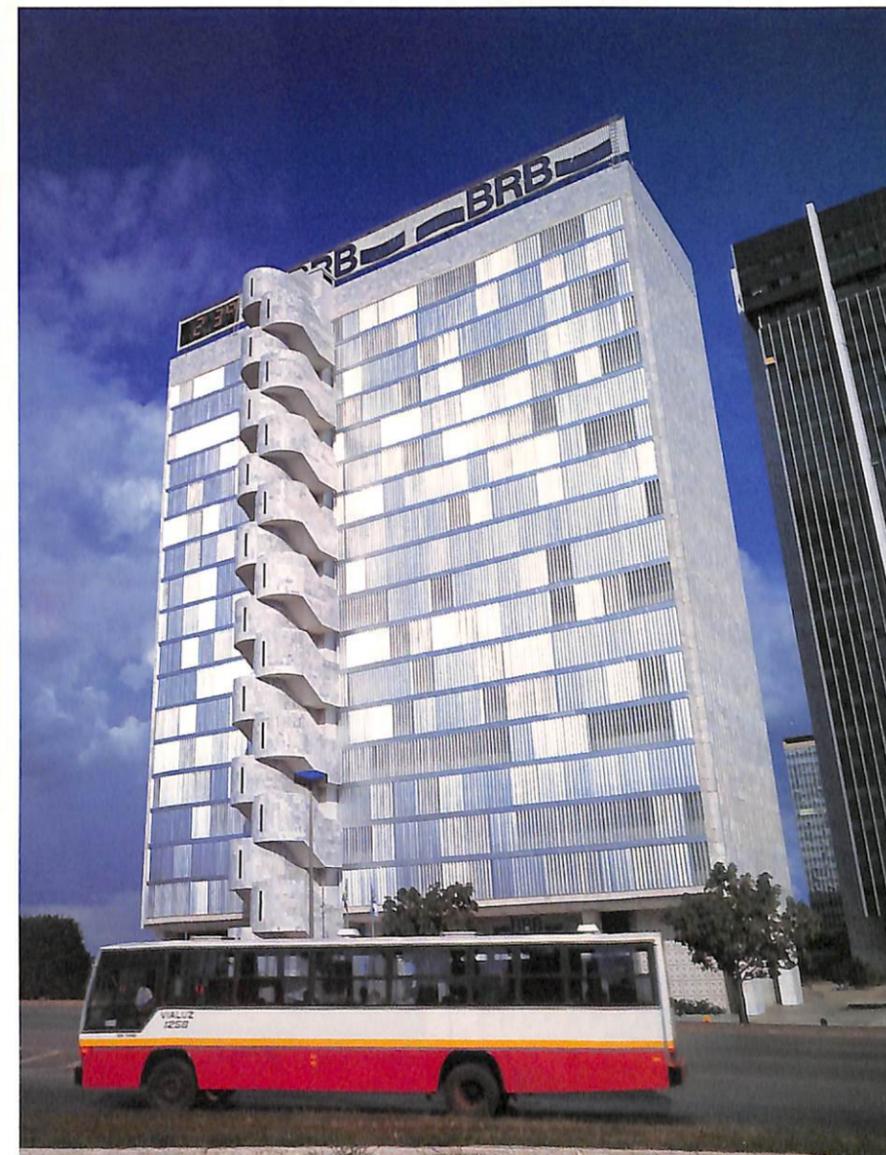
SUNSHADE ブリーズ・ソレイユのシンフォニー

ブラジリアでは、強烈な日差しが建築を直撃するため、
日照を避けるさまざまな方法が工夫されている。ブリーズ・ソレイユもその一つ。
もともと日差しを避けるために考案された日除けを、ブリーズ・ソレイユとして
建築のディテールを形成するデザイン言語へ昇華させたのは、ル・コルビュジエであった。
ブリーズ・ソレイユは、ブラジリアの地において爆発的な発達をみた。

BRASÍLIA



上左：一見可動式のように錯覚させるブリーズ・ソレイユ
上中：単純に連続する箱型のビルも、ブリーズ・ソレイユによって
変化が与えられる。官庁街の各省庁
上右：ブリーズ・ソレイユのディテール
下3点共：業務地域に建つビルには、さまざまなデザインのブリーズ・
ソレイユが使われている



ブラジリアの都市と建築を知るキーワード

■オスカー・ニーマイヤー

Oscar Niemeyerは、1907年生まれ。リオデジャネイロの国立美術学校を卒業後ルシオ・コスタの建築事務所に入所、36年にはリオデジャネイロの教育保護省の設計顧問として招かれたル・コルビュジェと接し、深い影響を受ける。その後、コスタとの共作ニューヨーク万博ブラジル館や自邸などの設計で徐々に内外に知られるようになる。しかし、ニーマイヤーの名前を一躍有名に



ニーマイヤーの建築事務所分室

したのは、なんといっても新首都ブラジリアの建設であろう。56年に、クビチェック大統領の下その建築顧問になるとただちに新首都ブラジリアのマスタープランのコンペを実施し、また自らその公共建築物のほとんどの設計を行う。

ブラジリアでは、現在でもいくつかのプロジェクトがニーマイヤーの設計で進行している。そのため90年には、リオデジャネイロ事務所の分室をブラジリアに開設した。通常はニーマイヤーのプライベート・ミュージアムとして一般に公開されている。まさにブラジリアの歴史はニーマイヤーの歴史でもある。

■ルシオ・コスタ

Lucio Costaは、1902年生まれ、ブラジル近代建築の最長老。リオデジャネイロ美術学校校長をはじめ、ブラジル建築界の数々の要職を歴任する。

ブラジルでコスタに学んだ建築家は多く、ニーマイヤーもその一人だが、二人の結び付きはその後ブラジリアの建設でよりいっそう強いものとなる。ニーマイヤーも審査に加わった新首都ブラジリアのマスタープラン設計コンペに、第一席当選したのがコスタであったからだ。60人の公募の中から選ばれたそのプランは、官庁地区を機首にもつ飛行機型のデザイン。コスタによれば、その形は飛行機であると同時に十字(×印)でもあり、十字を記すところからこの計画は始まるという強い意志の表れでもあるのだそうだ。

いずれにせよニーマイヤーの建築とともにこのコスタの奇抜な都市デザインによって、ブラジリアは世界で最も有名な人工都市となったのである。

■プレーノ・ピロット

地図に十字を記すように大地に巨大な十字を記したというコスタのマスタープランは、ブラジル政府にとっては開拓の象徴としての意味も担っていたといわれている。すなわち、そのデザインはそのまま未開発地域である内陸に向かって飛び立とうとしている飛行機だというわけだ。しかし、これには疑問が残る。実際には飛行機の機首部分にあたる官庁地域は湾岸方向である東南を向いているからである。

それはともかくとしても、当時のブラジル政府に受け入れられたこのマスタープラン



歴史博物館内のプレーノ・ピロットの模型

は、まさしく「希望の都」を印象づけるにふさわしいデザインであったことはまちがいない。

ところで、この飛行機型のプランは実はブラジリアの中心部の開発計画で、ブラジリアという場合は周辺に11もの衛星都市をもつ新都市全体をさす。飛行機型の地域はいわばその首都であり、とくにプレーノ・ピロット(パイロット・プラン)と呼ばれている。期待されたスラムは、残念ながらプレーノ・ピロットの主だったところにはなかった。



プレーノ・ピロット胴体部分の緑地帯。議員会館からTV塔方向を見る

■クビチェック大統領

ブラジルでは、既に19世紀に遷都案が出され、具体的な調査も始まっていた。ブラジリアという名称が採択されたのが1892年、現地点に決定し定礎式が行われたのは1922年であった。

実際の開発が開始されたのが56年、そしてなんとその5年目の60年に遷都は実現してしまったのである。

「50年の進歩を5年で」をスローガンにその開発の指揮に当たったのが当時の大統領クビチェックである。インフラなどの産業基盤の整備と基幹産業の育成に努めたクビチェックは、まったくなにもない灌木が生えるだけの広大な大地に、へびや蚊に悩まされながらも自ら仮小屋を建てて住み、その陣頭指揮にあたったといわれる。それは、議会は大統領のいる場所ではしか開催できないというブラジルの法律を逆手にとって、

まず行政機能を移すという強引な手段であった。また、ブラジルは大統領の任期が5年に決められているということもあって、なんとしてもこの遷都を任期内に実現したいというクビチェックの執念の結果でもあった。文字通り道路をつくるところから始まったこの遷都計画。予定どおり60年4月1日世界に向かって新首都宣言は行なわれたのであった。

■ゾーニング

プレーノ・ピロットにおけるゾーニングはきわめて明白である。飛行機型の機首、胴体が行政・文化地区、両翼のつけねが商業施設を含む業務地域、両翼が住宅地域、後尾後方が工業地域と、ほぼ完璧に区分けされている。そのあまりに完璧なゾーニング



巨大なショッピング・センターにまとめられた商業地域

のために、ブラジリアはかえって「人間味のない都市」という不名誉な称号をいただくことになる。

しかし、実際にその地を踏んでみれば分かるように、広大な広さをもつプレーノ・ピロットは、その明確なゾーニングによって文節され、はじめて訪れるものにとっては、きわめて分かりやすい都市になっていることもまた事実である。

■スーパー・ブロック

住宅地の設計プランとして生まれた方法の



スーパー・ブロック。左奥の平屋建ての建物が幼稚園

一つ。住宅地内部の歩車分離を目的に、ルーバヤルドサック(袋小路)という道路計画を軸にした住宅地を一住区として、その組み合わせによってより大きな単位の住区をつくるというのがスーパー・ブロックである。

プレーノ・ピロット内の住宅地区計画にあたって、このスーパー・ブロックが採用された。240m四方の敷地に計画人口3000人を想定したスーパー・ブロックは、幼稚園1、小学校1を1住区に、それら4つの住区が集まって近隣住区を構成し、中学校、映画館、集会施設、商業施設を配置するというもの。

■クルマ優先の計画

プレーノ・ピロットで当初より疑問視され



上：クルマ優先の幹線道路下：けもの道がいたるところに。これも道路計画の不備が原因か



ていたのが歩車分離の計画だ。機能性を追究することによって選択された歩車分離であるが、スーパー・ブロックでの成功とは裏腹に、スーパー・ブロックどうしを結ぶ道路や業務地域内の幹線道路ではそれが大問題となっている。というのも、歩行者が道路を横切るということを想定していなかったらしく、道路の反対側へ行くためには、数車線を猛スピードで走り抜けていく大量のクルマに注意しながら横断しなければならぬからだ。取材者の印象では、それはまるで東名高速を横断する思いだった。

■経済階層別すみ分け

これは、所得水準によって居住地域を分離しようという考え方。すなわち、アッパー・クラスは、プレーノ・ピロットの人工湖をはさんだ対岸の1戸建ての住宅に、ミドル・



人工湖の湖畔にあるアッパー・クラス向けの会員制リゾート施設

クラスはスーパー・ブロック(プレーノ・ピロット内)の集合住宅に、ローワー・クラスは衛星都市の1戸建てや集合住宅に、という具合にすみ分けをさせるというもの。これまで治安やアメニティの観点から、同質の階層どうしの定住をよしとする意見は、都市計画家や建築家の中に根強くあった。まさしくそれを字義通り実践してみせたのがブラジリアであった。

しかし、この考え方は階層を固定化し、また管理社会的な色彩も強いので、近年とくに評判が悪い。